学長かわら版
TOKYO MEDICAL UNIVERSITY
第43号
発行日：2026年7月13日
編集・発行：
東京医科大学
学長企画ＰＴ
https://www.tokyo-med.ac.jp/univ/gakuchokawaraban.html

「広域連携型LICシンポジウム」を開催

～学生の「新潟での成長物語」を、日本の医療の質向上へ繋ぐ～

2026年6月19日、「広域連携型LICシンポジウム」を開催し、新潟県での長期滞在型臨床実習（LIC）の成果を共有しました。**全国10大学・21病院などから、来場者・オンライン参加者あわせて100名以上が参加**し、LIC導入の意義や今後の展望について意見交換が行われました。



「広域連携型」「診療科横断型」「学生の自主性主導型」

LICは、約3か月間地域の中小規模の病院に滞在し、総合診療を軸に一人の患者を継続的に診られる実習で、「広域連携型」、「診療科横断的」かつ「学生の主体性主導型」で学びを深める点が本学のLICの特徴です。**「広域連携型」とは大学と医療機関、自治体が立地や領域の垣根を超えて幅広く連携し、学生が地域の医療機関に長期間滞在して実践的な地域医療を学ぶ方法**のことです。本学では新潟県との「医師育成に関する連携協定」の締結により、**2025年度から私立大学として初めてLICを導入しており、2026年度は9名の学生が参加**し、幅広い診療経験とともに地域医療の実態を学びました。

学生の価値観や進路にも影響　「地域医療に貢献したい」の声

その成果として、**３か月のLICで「医学生が経験すべき手技・医療行為126項目」の9割以上を体験**するなど、高い学修効果が確認されています。LIC参加学生による実習の発表では、地域医療の現場で「主治医のような役割」を担い、患者や医療従事者との信頼関係を築く中で、医療を生活と一体で捉える視点や、専門にとらわれず全身を診る力の重要性を実感したことが報告されました。また、過疎地域や離島での実習を通じて、地域全体で医療を支える仕組みや、医師の役割の広がりにも理解が深まったようです。こうした経験は**学生の価値観や進路にも影響を与え、総合診療・地域医療への関心が高まり「地域医療に貢献したい」という志向を高める効果**が見られました。

シンポジウム
Report完全版

「３か月」が、信頼関係の構築と自主性の発揮に必要な期間

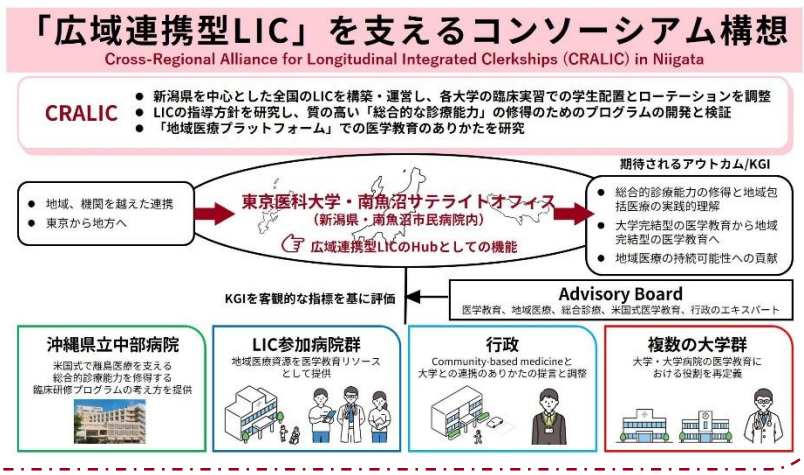
パネルディスカッションでは、**「3か月」という期間が信頼関係の構築と主体的な行動を促す上で重要である**ことが共有され、実習先からも学生が「医療チームの一員」として認識されるなどの成長が示されました。

南魚沼へのサテライトオフィス設置とLICの全国的な実施に向けたコンソーシアム構想

さらに、本学は**この夏 南魚沼市民病院にサテライトオフィスを設置し、大学・自治体・医療機関が連携するコンソーシアム構想を発表**しており、**LIC共有プラットフォームを整備し、全国での安定的な実施と教育基盤の構築を目指す**ことが改めて説明されました。

コンソーシアムのアドバイザリーボードの先生方からは、**LICがノンテクニカルスキルの習得や医師不足解消に寄与する可能性が指摘**され、今後は、**より多くの学生が体験できる体制整備が課題**として示されました。

本取り組みは、地域医療を担う医師の育成と、日本の医学教育・医療の質向上に資するものとして大きな期待が寄せられています。

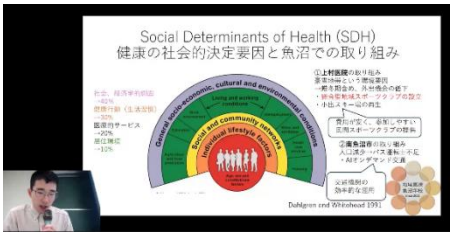


長期滞在型臨床実習（LIC）参加学生の実習報告

様々な院外実習で「暮らしとともにある」地域医療の役割を体感

（実習先：魚沼市立小出病院）

医学科第6学年 桝田康太さん



「なりきり主治医」として病棟実習を体験。さらに介護福祉や訪問診療といった院外研修にも積極的に参加し、高齢化率40%を超える魚沼地域では地域全体で医療を提供していることを実感。特に院外実習で行った上村医院では、豪雪地帯での地域住民の健康増進のため、総合型地域スポーツクラブを設立するなど、**医療機関が医療の枠を超えて、地域住民の生活の場につながっていることを体感**。　実習を通して**総合診療に大きな関心を抱き、「将来は魚沼の医療に貢献し、恩返ししたい。魚沼はメディカルホームタウン」**と語りました。

離島医療で得た「毎日ベッドサイドに足を運ぶ意味」

（実習先：佐渡総合病院）

医学科第6学年 田中大芽さん



病棟で「1人の医師」として、毎日ベッドサイドでの診察やカルテ記載、検査計画の策定、退院調整など、指導医と綿密に相談しながら診療に参加。**毎日足を運ぶことで、患者さんが何かあった時に医師に話してくれる関係性ができたことを体感**。「毎日観察することで、バイタルや数値だけでは測れないその日、その瞬間の患者さんの全身状態がわかるようになった。」といいます。**「指導医との信頼関係も継続的な実習を行うLICだからこそ作れた」という言葉も印象的**でした。

専門に関わらず、全身を診られる医師になりたい

（実習先：柏崎総合医療センター）

医学科第6学年 村松里香さん



地域医療ならではの課題と医師としての役割を目の当たりにし**「1人の医師が責任を持って患者さんを診る、医師としてのかっこよさ」**を熱く語りました。医療資源・人材が不足している地域では分業が難しく、専門外の領域でも医師が介入する必要があります。医師が、外来や病棟において専門外でも「総合内科」として患者さんを診たり、必要に応じてポータブルエコーを活用してその場で判断したりしている姿を間近で見て**「専門医でありながら、横断的に患者を最初から最後まで診られる医師」**という理想の医師像を持てたと発表しました。

<令和8年度 長期滞在型臨床実習（LIC）実習先（新潟県）>

【上越】・ＪＡ新潟厚生連 糸魚川総合病院
【中越】・ＪＡ新潟厚生連 柏崎総合医療センター・新潟県立 十日町病院
【魚沼】・南魚沼市立 南魚沼市民病院・魚沼市立 小出病院
【下越】・ＪＡ新潟厚生連 村上総合病院・新潟県立 坂町病院
【佐渡】・ＪＡ新潟厚生連 佐渡総合病院・佐渡市立 両津病院



学長コラム

宮澤学長からのひとことを「学長コラム」として定期的に発信！

Vol.7　ジェネラルを診られる医師はかっこいい

― 超高齢社会が求める医師像 ―

先日、6年生によるLIC(長期滞在型臨床実習)の成果発表会に参加した。発表内容はどれも素晴らしかったが、私の心に最も残ったのは、ある学生の言葉である。

「将来は専門性の高い分野に進みたい。しかし、ジェネラルを診られる医師はかっこいいと思うようになった」

この言葉に、私は大きな希望を感じた。誤解のないように申し上げたい。私はスペシャリストに深い敬意を抱いている。大学病院が担う高度先進医療は、まさに各分野の第一線の専門家たちによって支えられている。難治性疾患の克服や新しい治療法の開発は、高度な専門性なくして成し得ない。

しかし一方で、日本は世界に例を見ない超高齢社会を迎えている。私自身、定年後の3年間、高齢者の訪問診療に携わった。その現場で痛感したのは、多くの高齢患者が認知症、心不全、慢性腎疾患、糖尿病、フレイルなど複数の疾患を同時に抱えながら生活しているという現実である。

さらに、1960年代の高度経済成長期に建設されたエレベーターのない団地では、4階や5階に暮らす80代後半以降の高齢者も少なくない。加齢やフレイルの進行により、病院を受診したくても、まず階段を下りること自体が大きな負担となる。このように通院が困難となる高齢者は、今後ますます増えていくだろう。

医療は、患者が病院へ来ることを前提とした仕組みから、患者の暮らしを支える仕組みへと変化が求められている。在宅医療は、これからの超高齢社会を支える不可欠な社会インフラとなるであろう。

私はこれまで、「医学は真理を探究する学問であり、医療は最適解を追求する営みである」と述べてきた。現場で求められるのは、一つの臓器だけを診る力ではない。患者の背景や価値観、家族や社会との関わりを理解し、「最善の道」を考える力である。

総合性と専門性は対立するものではない。むしろ、優れたスペシャリストほど患者の全体を見ようとしている。総合性という土台の上に専門性を築く。その姿こそが、これからの超高齢社会に求められる医師像だと私は思う。

今回の発表会で、学生の口から自然にこのような言葉が生まれたことに、私はLIC教育の確かな成果を感じた。本学がミッションとして掲げる「患者とともに歩む医療人を育てる」とは、まさにそのような医師を育むことにある。